



小野家文書（群馬県立文書館收藏）

釈文解読協力者 有限会社 歴史の森 様

川田円珠姫之事
川田夷珠姫之事

往昔利根郡沼田之城主
其節八庄田ト号
今井土上村ナリ

往昔利根郡沼田之城主
其節八庄田ト号
今井土上村ナリ

三浦勘解由左衛門平景泰
迦葉山開基
龍華院殿ナリ 六

三浦勘解由左衛門平景泰
迦葉山開基
龍華院殿ナリ 六

世之孫川田次郎景政四代孫川田光清之

世之孫川田次郎景政四代孫川田光清之

娘なり幼少之内より甚詠歌を好時々

娘なり幼少之内より甚詠歌を好時々

歌吟をいたしける内二茂龍田山紅葉之歌

歌吟をいたしける内二茂龍田山紅葉之歌

名歌之由世二称美せられ後二大内御歌所

名歌之由世二称美せられ後二大内御歌所

迄達上聞に御製頂戴有之けるとなり其歌

正達と申し御製頂戴有之けるとなり其歌

龍田山紅葉をわけて入る月の錦に包む鏡也けり

龍田山紅葉をわけて入る月の錦に包む鏡也けり

御製

御製

上野の沼田の里に円なる珠の有るとは誰もしらすや

上野の沼田の里に円なる珠の有るとは誰もしらすや

御製之内円珠をもつて名といたしけるとや

御製之内円珠をもつて名といたしけるとや

右之歌記録之分や不審有之是ハ古今集

右之歌記録之分や不審有之是ハ古今集

有之筆者之誤ならんや然共任古記書之

有之筆者之誤ならんや然共任古記書之

此諺世二聞へ当世迄茂円珠姫と申事ハ

此諺世二聞へ当世迄茂円珠姫と申事ハ

浮世の人之耳口に留りし事 ふしきならずや
後世の今も平に流し事かしくんがるる

円珠女 座頭物 語と題し 狂歌なりと申

東海舟に産む物説く題し ねがひありと申

或山寺に小兒 三人有りて四十雀 を飼置ける二

或山寺に小兒三人有りて四十雀を飼置ける二

不計 春雪高ふ積りて 彼鳥死せり 兎共是

不計 春雪高ふ積りて 彼鳥死せり 兎共是

惜し 三不便之 余り雪仏を造り 銘々歌を

惜し 三不便之 余り雪仏を造り 銘々歌を

よ三用ひをし けるとなり

よ三用ひをし けるとなり

雪仏 造りもあへず 罪きゑて 落るしつくは

雪仏 造りもあへず 罪きゑて 落るしつくは

あのくたらく

あのくたらく

造る人皆 極楽江ゆき仏罪 もむくいもきへて跡なし

送る人皆 極楽江ゆき仏罪 もむくいもきへて跡なし

氷りをハ 座像になすや 雪仏 あられハ玉のかさり成らん

水に八座像の雪や雪佛の氷の玉のかさり成らん

右之外 円珠之歌と云有之略之

右之外 円珠之歌と云有之略之

此円珠女壮年之砌リハ 信州浪人 陶田 ヨウダ 弥兵衛と云人に

此円珠女壮年之砌リハ 信州浪人 陶田 ヨウダ 弥兵衛と云人に

嫁し年月を送りけるが彼之男 故郷に老

嫁し年月を送りけるが彼之男 故郷に老

母有之つれ共一向音 信不仕更二案する体

母有之つれ共一向音 信不仕更二案する体

にも無之唯うかくと過行事を円珠 疎んじ

にも無之唯うかくと過行事を円珠 疎んじ

公二は甚 不孝之人なり 自を如何程思召さる
公二と云ふ者あり 自ら自然に河を渡る

とも頼母子からず三綱の内二茂第一親子道
とも頼母子のしどに保の月夜才一親を乃

諸之罪の内二も不孝方大イなるなしと聞
諸之罪の内二も不孝方大イなるなしと聞

然ルに御母公之事 思召 遣つれさるハ天命ニ
然ルに御母公之事 思召 遣つれさるハ天命ニ

背く所なり斯申せは逆妾ハ二心なし 誓
背く所なり斯申せは逆妾ハ二心なし 誓

紙を書一毫の書を作り見せたり 其書
紙を書一毫の書を作り見せたり 其書

円珠集と銘じ 寛永之頃迄ハ有之当時ハ
円珠集と銘じ 寛永之頃迄ハ有之当時ハ

不見云ク 斯而弥兵衛八故 郷江参り 老母二
不貞云く 躬ら海濱、故郷に参り老母

孝行を尽しけるか一兩年 茂過 老母死せり

孝行を尽しけるか一兩年 茂過 老母死せり

ねんころ

亡迹懇に取置き沼田へ立戻り旧室江入

亡迹懇に取置き沼田へ立戻り旧室江入

りて見れば前度之住居と六事 替り床二

りて見れば前度之住居と六事 替り床二

釈迦三尊 十方世界之諸仏名号を掛ケ

釈迦三尊 十方世界之諸仏名号を掛ケ

円珠ハ髪喝 食の姿と成り 黒衣二掛 羅を

円珠ハ髪喝 食の姿と成り 黒衣二掛 羅を

掛たり 香の煙り薫して 最貴く見へ

掛たり 香の煙り薫して 最貴く見へ

たりける弥兵衛とは是を見て女人さへ如此男之
ありき活き通いと見え見ても女人の此世

身として何と思ひきりさへん 迎 剃髪 染衣之

身として何と思ひきりさへん 迎 剃髪 染衣之

姿となり 諸国修行と出二けり其頃関 八州之

姿となり 諸国修行と出二けり其頃関 八州之

官領として滝川左近将監勝 益と申シ

官領として滝川左近将監勝 益と申シ

厩橋二居 住す 滝川義太夫 沼田城代たる二よつて

厩橋二居 住す 滝川義太夫 沼田城代たる二よつて

勝益 円珠事 を聞 前 橋へ召 寄らる 天正

勝益 円珠事 を聞 前 橋へ召 寄らる 天正

十年 六月六日信 長公為 惟住日向守 被弒

十年 六月六日信 長公為 惟住日向守 被弒

仰二依而 滝川北条と一戦二打負ケ 直二上洛
仰二依而 滝川北条と一戦二打負ケ 直二上洛
仰二依而 滝川北条と一戦二打負ケ 直二上洛

したりければ 惣 国之乱となりニけり 円珠は
したりければ 惣 国之乱となりニけり 円珠は
したりければ 惣 国之乱となりニけり 円珠は

此節大病ニ而歩 行 茂不叶城中に打伏し
此節大病ニ而歩 行 茂不叶城中に打伏し
此節大病ニ而歩 行 茂不叶城中に打伏し

居たりければ北条 殿如何成者ぞと 尋給ふ
居たりければ北条 殿如何成者ぞと 尋給ふ
居たりければ北条 殿如何成者ぞと 尋給ふ

円珠なりと答ければ 偕八年及し 歌人
円珠なりと答ければ 偕八年及し 歌人
円珠なりと答ければ 偕八年及し 歌人

なり実の円珠ならハ歌 をよミ候へ命を助
なり実の円珠ならハ歌 をよミ候へ命を助
なり実の円珠ならハ歌 をよミ候へ命を助

けんとあり ければ 此大病ニ及て 詠 歌 事
けんとあり ければ 此大病ニ及て 詠 歌 事
けんとあり ければ 此大病ニ及て 詠 歌 事

思ひ不寄と答ければ達而と申二ぞ左茂あらは
目わあふ谷の道言のり我たあひら

題を給われかしと依而左ならハニツニツ四ツと
題を給われかしと依而左ならニツニツ四ツと

望三給ふ

望三給ふ

如何にせん恋しき人の玉章によまれぬ文字のニツニツ四ツ

昔世にせん恋しき人の玉章によまれぬ文字のニツニツ四ツ

と息茂絶々に聞へければ甚た不便二思召れ

と息茂絶々に聞へければ甚た不便二思召れ

思ふ所江送すへしと宣ひける故郷なれば

思ふ所江送すへしと宣ひける故郷なれば

沼田懐しき旨答ひけれ然らハ沼田江送るへしと

沼田懐しき旨答ひけれ然らハ沼田江送るへしと

附々の人を添 人々勞 りけれ共長 病ゆへ道中
附々の人を添 人々勞 りけれ共長 病ゆへ道中

にて空 く成りしと也 女性なれ共才智文
にて空 く成りしと也 女性なれ共才智文

覺世に勝れ名を後代ニ残 し けるとなり

覺世に勝れ名を後代ニ残 し けるとなり

法名 流 泉 院 と 号

此外 円 珠 猿 物語ト号 戲 詞
等是アリ 略 不 記亦此 辺所々
歌 有

法名 流 泉 院 と 号
い 年 久 疎 後 物 諸 ト 号 戲 詞
亦 是 ア リ 略 不 記 亦 此 辺 所 々
哥 有

川 場 桜 川
川 場 桜 川

水かミは吉野の山にあらね共 波にも花のさくら川にて

水かミは吉野の山にあらね共 波にも花のさくら川にて

滝棚の原

高平の水の流れや白沢の沼田にかゝる滝棚が原

高平の水の流れや白沢の沼田にかゝる滝棚が原

滝棚の西五六岩

滝棚の西五六岩

うき思ひ斯とは誰に岩はしらかゝる蔦葉の色替るとも

うき思ひ斯とは誰に岩はしらかゝる蔦葉の色替るとも

沼田母公二首

沼田母公二首

世にあらぬひなの旅路をあわれとは紅葉も思へ破れ

世にあらぬひなの旅路をあわれとは紅葉も思へ破れ

佐保鹿の声に枕をそばだてゝ紅葉のむしろへ破れ

佐保鹿の声に枕をそばだてゝ紅葉のむしろへ破れ

玉原平氏母公

玉原平氏母公

照る月の宿かる露の玉原二心あるへき女郎花哉

照る月の宿かる露の玉原二心あるへき女郎花哉

藤原湯之小屋名木

藤原湯之小屋名木

心なき常盤の松もなひくなりつれなき人二目見せはや

心なき常盤の松もなひくなりつれなき人二目見せはや

硯田母公

硯田母公

波×によりく見ゆる村かもめ水の庭ニも××有て

波×によりく見ゆる村かもめ水の庭ニも××有て

榛名三社

榛名三社

たな引や霞も匂ふ桜ニラはな常盤と見ゆる三榛名の森
あけりや原の向ふ橋もなほ春の風を待たぬ

伊香保の沼 三才図

伊香保の沼 三才図

伊香のやいかほの沼のいかにして恋しき人を一目見んとや

伊香のやいかほの沼のいかにして恋しき人を一目見んとや

利根川

利根川

笹わけば袖こそすれねとね川の石ハふむ共いさかわらよ破れ

笹わけば袖こそすれねとね川の石ハふむ共いさかわらよ破れ

東路のさの板橋取はなし 恋しき妹ニあわん破れ

東路のさの板橋取はなし 恋しき妹ニあわん破れ